★キノコ雲の下には・日本人留学生の訴えに＝田中靖宏

「きのこ雲の下には兵士でなく市民がいました。罪のない人たちの命を奪うことに誇りを感じるべきでしょうか」。原爆のキノコ雲を校章にしている米国の高校に留学した日本の高校生（古賀野々華さん）が訴えた。この町と学校の歴史を調べると、彼女にはどんなに勇気が必要だったかがわかる。

米西部ワシントン州のリッチランド高校。校内の至るところにＲとキノコ雲をあしらった校章が描かれている。彼女が出演した校内放送は「アトミックＴＶ」。司会者は視聴する仲間の生徒たちを「ボンバーズ」（爆撃機）とよんでいる。発言する彼女の背後には第二次大戦に多用されたＢ17 重爆撃機の編隊の壁画が描かれている。

彼女の発言に先立って「原爆雲を誇りにしている」「伝統があるからね」といった生徒たちの発言が次々と流される。同校のスポーツチームのニックネームは「爆撃機」。応援は「奴らに原爆を落とせ、炎上するまで原爆を落とせ」だ。

ほぼ砂漠に近かったこの町が活気ついたのは米国の原爆製造「マンハッタン計画」の一部になった時からだ。建設ブームが起きて数百人の人口が一万数千人になった。当時は秘密にされていたが、長崎原爆のファットマンに使われたプルトニウムがここで製造された。

原爆投下と戦勝の高揚感のなかで、原爆を正当化する一大キャンペーンが行われた。「原爆が数十万の米兵の命を救った」「現代科学の先端を切り開いて歴史を造った」など。生徒会が校章を「ビーバー」から「キノコ雲」に変える決定をした（1945 年 9 月）。戦時中、町を挙げてＢ１７一機を買う募金運動があった。月給の一日分カンパで達成したことが町の誇りになった。

日本の被爆者や平和活動家がたびたび訪問。1980 年代には広島の小学生たちが、替わりの校章案とともに平和を訴える手紙を届けた。そのたびに校内外で校章を変えようという運動がおこった。9 人の教員が連名で発議したこともあった。日本の学生グループの訴えに心を動かされたフットボールの監督が「恥ずかしくていたたまれなかった」と、ヘルメットの校章を変えようと提案したこともあった。

そのたびに「地元の誇りを傷つけるのか」「郷土を侮辱する陰謀」などと抗議や

反論が巻き起こった。卒業生の一人が論争の歴史をつぶさに検証している。「爆撃機と爆弾＝神話と歴史、伝統」（キース・マーピン２００１）題する論考には史実がどのように歪曲されて「原爆の故郷」という神話が作られたかが詳述されている。

古賀野々華さんのビデオ出演（5 月末）は、教師や地元の父兄たちの援助で実現、した。それを地元の新聞が取り上げたことで知られることになった。これまでと違ってＳＮＳを通じて世界に拡散している。（平和新聞８月 25 日号）